

ケースのツボとそこに 合わさる言葉（１）

岡田 隆介

児童精神科医

１． ケースのツボ

誰でもそうだと思いますが、私も面接のとき、そこでしか感じられないコンテキストをとらえようと視聴覚の感度をギリギリまで高めます。また事例検討会の席では、記録と行間からケースのリアリティを感じようとピリピリするほど皮膚感覚をときずまします。そうやってケースの全体像を把握しようとしています。

全体が見えてケースの中核をとらえた気になると、「よし、分かった」とひとまず安堵するのですが、少し立つとそれが揺れだします。どう言えばいいのでしょうか、全体がみえて部分がかすんでいくような感じ、ケースが見えてポイントがわからなくなる不安、そんなものが襲ってくるのです。

ここで言うポイントとは、臨床の感どころのことです（勘所ではありません、念のため）。わたしはツボと呼んでいます、いずれにしても、さほど理屈のあるものではありません。これは目とか耳、あるいは肌でわかるものではないと思います。ツボを嗅ぎ分けるわけですから、嗅覚的なものでしょう。

ここがツボだと思ったら、その近辺を押さえます。すると、ちょっとした言葉とかメタファーが浮かびます。たいした根拠もなく浮かんでくるものですから、自分でも意味がわからないということがあります。

もちろん、ツボは必ず嗅ぎあてられるものではなく、結局わからず終いということも多いです。わた

しは、面接場面とは真反対の状態、つまり意識レベルがやや低目のときにツボに近づけると信じています。

何かが浮かんだらすぐ口にしたほうがいいでしょう。イメージがはっきりつながるまで暖めればいいのですが、そんなことをしていると消えてしまいます。そんなわけで、口にした後で「オレ、なにを言ってるんだろ？」ってことにもなります。

ツボから出た言葉は相手の腑に落ちやすい、これはあると思います。面接に来ている家族とか会議の参加者に伝えると、瞬間、場の空気が替わります。もちろん、だからといってそれで問題が解決するわけではありません。しかし、面接や会議の流れでとても重要な分岐点になることは間違いありません。

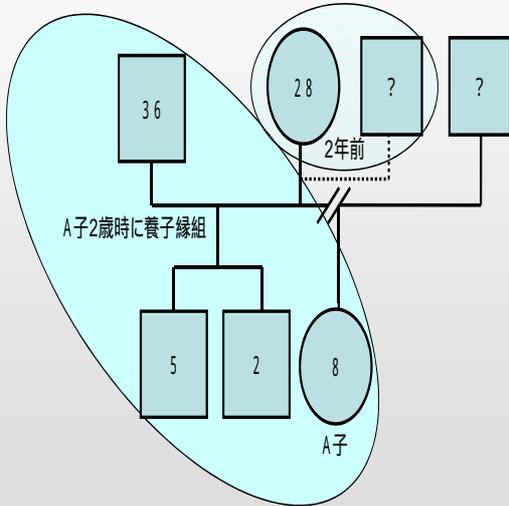
ケースの全体像を学ぶワークショップとか、中核部分を押さえてくれるスーパービジョンというのはよくあります。でも、ケースのツボを探る方法なんて聞いたことがないでしょう。実際のところ、ポーと報告を聞いたりケースを読む以外にこれといっていい方法はないわけですが。

ツボに臨床的な意味があるのか、やってみる価値があるのか、正直、よく分りません。そんな怪しげな話ですが、このマガジンだと読んでもらえそうな気がするので、例をあげて説明したいと思います。

なお症例は、プライバシー保護のため大きく創作を加えて事実からは遠いものになっていることをお断りしておきます。

A子の家族関係図

(1) 家族関係図



2. A子の処遇検討会でのこと

A子は、3人姉弟（長男5歳、次男2歳）の一番上、といってもまだ8歳だった。母親は2年前に、別の男の元へ走った。それまで夫からひどい暴力をうけていたとはいえ、当時生まれて間もなかった次男を置いての家出であった。

妻に逃げられてからの養父は酒量が増え、毎晩A子に酒を買いに行かせた。そして朝まで愚痴の相手をさせたうえ、時には暴力もふるった。学校にはほとんど行かせてもらえず、弟たちの世話や家事を押しつけられた。それでも文句一つ言わずに頑張る、A子はそういう子だった。

ある日、長期欠席を心配した担任が家庭訪問をして彼女の生活実態を知り、児童相談所に虐待として通報した。児童福祉司は何度も家庭訪問をしたが、養父に強く拒まれた。

職権による立ち入り調査を検討していたところ、酒を飲みすぎた養父がケガで入院し、それを機に3人を一時保護することができた。A子はとても小3とは思えない大人びた感じだった。母親に棄てられ、養父に虐待されていた事に関しては口を閉ざした。

一時保護所では淡々と弟たちの面倒を見て過ごし

ていたし、心理テストでは幸せそうな一家だんらんの家族画を描いて見せるなど、諸々の感情を見事なまでに抑えていた。

紆余曲折を経て、姉弟は児童養護施設に措置された。A子に変化が起こったのは、そこからである。施設における粗暴な言動や行為が増えていき、やがて同室の子どもを持ち物を盗ったことをたしなめた先生への暴力事件を引き起こしたのだ。

児相の所見とあまりにも違っていることに混乱した施設側の提案で、ケース処遇検討会がもたれることになった。施設スタッフは、これまでの虐待がA子の人格形成にどのような影響があったかを知りたいと言った。その上で、カウンセリングなど心理的なサポートをしてほしいという希望がだされた。児相のワーカーは、一時保護所をでてわずかの期間にここまで変わったことに驚き、担当職員との関係に焦点を当てようとした。心理判定員の理解は、彼女が担当職員に母親を投影して抑えていた攻撃性を表面化させたというものであった。

参加者は、それぞれの立場からA子のこころの痛手と今の問題とのつながりを論じていた。熱心で重くて出口の見えないやりとりを聞きながら、わたしの意識レベルは確実に下がっていった。

気がついたら、みんながこちらを見ていた。「みんな、なにかに縛られてる感じがするけど・・・」。そう発言したのは、確かに自分だった。慌てて施設職員をねぎらい、戸惑いに共感し、児相の記録があまり役立たなかったことをわびる。それから、付け加えた。

「なにが縛ってるんですかね、この会議を・・・」

（そんな気味が悪いことを）

「いや、みなさんはそれぞれの仕事とか立場を代表してここにいるわけでしょ。手ぶらじゃ帰らないぞ！みたいな、立場の呪縛。それから、仕事柄でしょうけど、全員がこのケースのポイントは虐待で、A子のこころのキズをどうするかという枠で議論している、仕事の呪縛。そういう意味です」

（けど、トラウマみたいなものは確かに抱えているでしょう？）

「彼女が、先生たちに自分はこころにキズとか重荷があるって言ったとか？」

（まだ、そんな話は出てませんが、生育史を見た

ら明らかだと思います)

「こんな仕事してるとどうしても虐待に目がいってしまふ、それを性(さが)だなんて言ってしまったら、それは違うやろ! ってツッコミたくなるけど。いや、ちょっと待って。なんか、似てる気がしません?」

(誰が? 誰と?)

「だから、みんなが、A子と」。ここに至って、やっと自分が何を言いたいかはわかってきた。

「ほら、みんなが自分の役割をもってここに集まって、その枠からしかものごとを見ようとしていないでしょ。それって、A子と同じじゃないですか? 彼女も自分の役割に縛られて、その枠で自分と周りとの関係を見てるわけで」

(A子はこころのキズに縛られてるんじゃないんですか?)

「そうかなあ、さっき話が出てたけど、一時保護中、母親は面会には来ず、弟たちをお願い、いつか迎えに行くから、みたいな電話があったんですって? たぶん、同じようなことを、子どもたちを置いて出る際にA子に言い残したんじゃないかと思うんです。良心の仮借か、言い訳か、調子のよさか、そこまでは分からないけど。」

「でね、A子はその日を夢に見て懸命に養父の世話をし、弟たちを守ってきたと思います。それを真に受ける以外に、なんの支えもないわけやから。幸せだった頃の家庭、やさしかった母親をどんどん膨らませてイメージし、自分さえ我慢して頑張ればもう一度そこに戻れる、そんなストーリーをずっと生きてきた。そして実際に、この家になくってはならない人間となってしまった。妻・母親代わりの枠にはまりきったわけです。それを耐えたのは、たぶん、彼女のストーリーが“家族は再統合する”というエンディングになってるからだと思います。」

ところが、施設に行くと予想もしないことが待っていた。ぜんぜん自分のストーリー通りにいかないわけですよ。だって、母親代わりという自分の役割が無い。弟たちは、先生方がしっかりと面倒を見てくれる。それどころか、自分のことまで世話してくれる」

(そのどこがいけなかったんですか?)

「この役割のかなめは、家族に自分が必要とされて

いる、そこです。そこが、空白になってしまった。それはA子の支えただただけでなく、幸せな日に戻る約束の切符でもあったのに」

3. ツボをめくって

わたしは、ケースのツボはトラウマではなく役割だと臭ったんです。こころのキズは、確かにケースの中核部分でしょう。それはケース全体を支える骨格です。ですが、ツボじゃありません。中核からは、彼女にどんな援助が必要かという方向に議論がすすみます。でも役割というツボからは、A子がどんな役割を持ってどんなストーリーを生きるかという話になります。

中核が骨組織なら、ツボは外界と接する皮膚組織です。骨折は専門家が扱います。たとえば、この機会に天使の衣装を脱いですべてを吐き出せばいい、という意見が多くありました。その場合、彼女の記憶の中で期待が作った母親イメージと、絶望によって塗り替えられた母親像との落差に折り合いをつけるには、こころの専門家の手助けが要るでしょう。

一方、皮膚の擦過傷は自分で手当てします。新しく見つける自分の役割、自分が必要とされている外の世界を生きていくストーリー、それらは生活の中で作られるものです。

骨折と擦過傷、どちらが深いとか正しいといった話ではありません。そんなことは誰にもわかりません。ただ援助者は選ぶことができます、外科医じゃないですから。そしてA子は援助者を選び、その人に自分のストーリーを語り生きていくわけです。

さて、会議では役割という言葉はみんなの腑に落ちたように見えました。そして、施設職員は帰ってすぐそれを処遇に反映してくれました。もちろん、それでA子の問題が一挙に解決するわけはありません。

記憶のひとつひとつはそのままであっても、それをどう振り返り、どんなふうに語るかは変わります。トラウマと違って役割は、新たなストーリーの中ではがすことも新たに与えることもできるでしょう。役割は、そうした可能性を秘めたツボでした。